

令和 6 年度 教育課程特例校実施状況（自己評価・学校関係者評価）

1 教育課程特例校としての取組		本校では、平成 26 年度から平成 29 年度に研究開発学校の指定を受け、小学校の全学年におけるグローバル人材を育成するための外国語活動・英語科のカリキュラム開発を行った。それらの研究成果を基盤として、教育課程特例校の指定を受け、中学年における総合的な学習の時間を 25 時間縮減し、外国語活動を 25 時間増設した教育課程を編成することで、異文化理解や平和学習などに関わるコミュニケーション活動を発展的に展開するカリキュラムを実施する。
2 自己評価	(1) 成果	○英語を産出する機会が多く設定されることで、音声での英語コミュニケーションに慣れ、自然な発音を身につけることができた。 ○英語圏の国をはじめ、様々な国の文化について学ぶことで、外国を身近に感じ、知識を身につけることができた。 ○外国語を身近なものとして親しむことができ、海外からの訪問者にも積極的にコミュニケーションを取る姿勢が見られた。
	(2) 課題	○前年度の課題をふまえ、既習の事項をもとに着実に積み上げていくスモールステップの指導を行うことで中学年から高学年への学習の接続が進んだが、コミュニケーションに向かう態度には依然として個人差が見られる。この点については特定の教科だけでなく、学校生活全体の中で培っていくことが求められる。 ○前年度の課題である楽しく外国語や異文化を学ぶ姿は高学年においても見られたが、「楽しさ」の質をさらに追究する必要がある。具体的には、外国語でどのような内容を学習するかに関して、内容統合型の外国語学習についても検討していきたい。
	(3) 評価	【B】※評価は A（十分に成果があった）、B（成果があった）、C（やや成果があった）、D（成果がなかった）
3 学校関係者評価	(1) 意見	○附属小学校の特色になっていると思われるため、引き続き取り組んでいただきたい。 ○子どもたちが外国の方々や異文化への興味が沸いたのであれば、効果があったと感じる。個人差が見られるという課題にどのように取り組むかが今後の課題であろう。 ○英語を平和学習に生かせる取組があってもよいのではないか。 ○外国語活動の増加により、子どもたちの将来の夢が広がっていくと思うので、今後も取り組んでほしい。 ○焦点化したカリキュラムによる実践研究が望まれる。 ○英語学習では発話の機会を増やすことにこだわってほしい。
	(2) 評価	【B】※評価は A（十分に成果があった） B（成果があった） C（やや成果があった） D（成果がなかった）